書籍紹介

南米チリをサケ輸出大国に変えた日本人たち

細野昭雄［著］（2010） ダイヤモンド社
地球選書 001　192 ページ　1,500 円＋税

本書に記されているのは，日本人が水産技術を通して世界に貢献した一つの軌跡である。人の住まない不毛の地であった南米チリ・パタゴニア地方に日本人とチリ人とが協力し合いサケ養殖技術を確立し，ついには世界各国へサケを輸出する産業にまで発展させるに至った，現代の産業革命とも言える事業である。日本の国際協力事業団（JICA，現在の国際協力機構）がチリ国政府の要請を受け，日本人技術者と研究者が派遣され，悪戦苦闘の末にサケの飼育技術を現地に定着させた。その飼育技術を日本の民間企業が海面養殖技術へと開花させ，さらにチリの民間企業と財団がその技術を深化発展させて，今日の国際的な輸出産業にまで展開させた。チリ産のギンザケ，アトランティックサーモン，トラウトは，日本でも回転寿司店やスーパーの魚売り場で周年目にすることができるようになった。1960 年代から今日に至る間に，日本人とチリ人がどのように協力し合い，時には苦難を共にしてどのように乗り切ってきたか，それら技術協力の歩みが南米の政治・経済に造詣の深い JICA 研究所所長の細野昭雄氏によって時代を追って記載されている。

1980 年代はふ化放流技術が北海道から本州へ，国内から海外へと展開し始めた時代であった。筆者が水産庁北海道さけ・ますふ化場（後にさけ・ます資源管理センター，さけますセンターに改組された）に入庁したのもその頃で，まもなく研究職も駆り出され，千歳支場でサクラマス卵を南米チリに輸送する作業を手伝ったことがあった。その当時はサクラマス卵の輸送がどれほど国際的な事業か，この先どのように発展するのか全く想像できなかった。その後しばらくして，チリにおいて JICA 専門家として活躍された，北海道さけ・ますふ化場 OB の長澤有晃氏からサクラマス卵の輸送が JICA のプロジェクトの一環であったことを聞かされた。本書には随所に長澤氏が登場し，当時のプロジェクトの様子が刻銘に記されている。

本書の冒頭で「チリにおけるサケ産業の歴史は，冬の零下 20 度にもなるチリの最南端の小さな街に，日本の水産専門家，長澤有晃と白石芳一が着任したことにはじまる」とある。まさに二人の日本人によって日本とチリの国家プロジェクトがスタートを切ったのであった。しかし，現地での仕事は初めから決して平坦なものではなかった。チリに着任直後に体調を崩した，淡水区水産研究所（現在の増養殖研究所の前身）から派遣されていた白石氏を病院に送り届けたそのセスナ機で，北海道から届いたばかりの卵をコジャイケという町のふ化施設に運ぶという壮絶なドラマがあり，直後白石氏はふ化するサケの稚魚を見ることもなく現地で息をひきとった。長澤氏が遠く離れた南米の地でサケプロジェクトに身を投じる意を決したきっかけは，亡くなった白石氏の「北太平洋のサケマス漁業と同じような漁業を南半球にも興してみたいという大きな希望を抱いた」という言葉であったと記されている。

筆者は現在中央水産研究所で主にさけます類の生産・流通に関する経済研究を行っており，養殖生産に力を入れるチリやノルウェーの動向にも注目している。飛行機で 30 時間以上かかる遠いチリへ出かけるのは容易ではなく，本書の記述内容は資料としても非常に貴重である。このプロジェクトでは，後に「サケ稚魚のふ化放流事業」から「生簀でのサケ親魚の生産事業」に発想を転換したことにより，生産技術の伝承とその改良が促進され，さらに民間企業の参入へとつながり，養殖産業が育成され，チリをサケ輸出大国へと成長させた礎になったことが分かる。

また，本書は経済書としても大いに参考になる。それはパタゴニア地方という産業と無縁の地に新に産業を創出した過程が，人と人の連携，組織と組織の連携，国と国の連携の各レベルで詳細に分析され説明されているからである。サケ養殖が成功したことが引き金になって，別の水産養殖産業が興ったり，現地の水産加工技術の高度化にも影響を与えたりして，サケ産業クラスターを確立することに 20 年で成功していることが分かる。もちろんチリが国際的に見て消費地から離れているという地理的条件も，加工技術の高度化を後押しした要因の一つと記述されている。

本書に記載されたチリのサケ産業の形成・成長過程，産業のクラスター化を詳細に分析研究することによって，我が国の地域の産業振興政策のヒントが得られよう。ふ化放流事業を基盤とした日本のサケ産業を，いかにクラスター化するかという方向を探るためのヒントも多く含んでいる。このような観点でも本書は中身の濃い本であり，水産研究者としてこれからも座右に置いておきたい一冊である。そしてぜひ英語版を出版していただき，広く海外で読まれることを望みたい。本書は日本が元気だった頃の一つの証しである。これからも研究の成果としての技術が水産の分野で世界に貢献できるよう，日々努力して行きたい気持ちにさせる書である。

本書の主人公である長澤有晃氏は，本年 6 月 22 日に惜しまれながらご逝去されたことを付記する。ここに氏

の功績に感謝申し上げ，ご冥福をお祈りする。

（経営経済研究センター　清水　幾太郎）

連絡先
独立行政法人水産総合研究センター
中央水産研究所　経営経済研究センター
〒 236-8648 神奈川県横浜市金沢区福浦 2-12-4
TEL：045-788-7615（代表）
FAX：045-788-5001（代表）
http://nrifs.fra.affrc.go.jp